

校外取材

新聞部 全国の舞台へ

坂の上通信

令和元年八月二十六日
広島市立美鈴が丘高等学校
新聞文芸部(四〇三演習室)

各県の新聞部員と交流

第43回となる全国高等学校総合文化祭(総文)は、佐賀県で行われた。広島県高等学校新聞コンクールで優秀賞を受賞したことで、美高新聞文芸部は県推薦枠として2名が参加した。当日の様子をレポートする。

美高より参加したのは部長の中澤(3年)と、福田(2年)の2名。そのほか西条農業高等学校より2名、崇徳高等学校から4名、合計8名が参加した。7月29日(月)午前10時に広島駅に集合したのち、博多を経由して佐賀県の会場に到着した。

総文の内容の中心は、班ごとで交流新聞を作ることである。全国から集まった新聞部員が6人ごと48の班に分けられ、佐賀県の各地を取材。各班B4サイズの新新聞を2面作成する。

例えば中澤の班は北海道、広島、神奈川、富山、埼玉、山形の生徒で構成され、日本磁器発祥の地、有田を訪れた。日程は、一日目の午後は各班での交流会。二日目は取材活動と編集会議。三日目は新聞製作とその講評、そして研修取材である。

暑い三日間であったが、会場も大きな熱気に包まれていた。山口醤油醸造場も訪れ、三代目の山口末昭さん(71)にもお話をうかがった。この会社では、木樽で作った醤油の販売をしている。木樽で作ることにより木の風味が高まり、一層まろやかな味になるという。商品は主に料

古き良き街並み 肥前浜宿

福田(2年)が所属していた9班では、肥前浜宿の酒蔵通りへ取材に行った。肥前浜宿は木造建築や瓦屋根が多く昔ながらの町並みを残しており、地酒を多く製造、販売している。

今回訪れたのは「観光酒造肥前屋」。土作り、米作りから始まり商品の加工・販売に至るまで一社で完結する、第六次産業を展開する会社だ。また、甘酒をベースにしたソフトクリームや、麦茶かき氷などのスイーツ販売も行われている。

このように、肥前浜宿は伝統ある商品を製造、販売している。浜宿は「重要伝統的建造

物群保存地区」に選定されており、江戸時代から続く伝統的な街並みを楽しむことができる。

中でも「旧筒井家」は、古民家の住み心地が体験できる移住体験施設。見た目は古民家だがクラーやIHなどの設備は整っている。また跳ね上げ戸という下から上に持ち上げる戸があり古民家ならではの味わいを感じられる。古民家の魅力発信、また過疎化の防止として期待されている。

山口醤油醸造場も訪れ、三代目の山口末昭さん(71)にもお話をうかがった。この会社では、木樽で作った醤油の販売をしている。木樽で作ることにより木の風味が高まり、一層まろやかな味になるという。商品は主に料



お試しで住むこともできる旧筒井家

新聞大会の主な日程(3日間)

日付	内容
7/29(月)	(10:00) 広島駅に集合 (14:00) 佐賀に到着 佐賀新聞社を見学 (16:30) 生徒交流会 (17:30) 交流新聞班別会議
7/30(火)	(7:20) ホテルを出発 (9:00) 開会式・講話など (10:40) 交流新聞の編集会議・昼食 (11:30) 佐賀県各地へ取材(バス) (16:30) 会場へ帰着。新聞製作開始
7/31(水)	(7:20) ホテルを出発 (8:30) 交流新聞製作 (11:30) 交流新聞完成 代表生徒の活動報告など (13:20) 交流新聞の講評、閉会式 (14:45) 研修取材(吉野ヶ里遺跡) (20:00) 広島に到着

新聞社を見学

29日午後、佐賀に到着したのち少し時間に余裕があったため、広島の3校は佐賀新聞社を見学した。佐賀新聞社は佐賀県の日刊地方新聞で、明治17年の創業。現在の発行部数は約12万6千部で、中国新聞のおおよそ4分の1である。



急な申し出にも関わらず、運転機や編集部の様子を見学させていただくことができた。運転機で使う巻紙が1トンもの重さであることや、新聞の上下がギザギザで小さな穴が開いているのは裁断の都合であることなど、興味深い話を聞くことができた。

その中で飛び込んでみたのが「博多一幸舎総本店」。店先にある「元祖泡系」という大きな看板に目を引かれたためだ。



スープには細かな泡が

初日の昼食は、博多でとることになった。顧問の提案で博多ラーメンを食べることにしたが、まず困ったのがどの店舗に入るのかという問題。そう、博多駅周辺には無数のラーメン店がひしめいているのだ。

こんなものを食べました①

注文したのは定番のラーメンと餃子。豚骨の香りと、水と油が合わさってできるスープの泡が特徴だ。やや薄味に感じたが、はもつちりとして食べたえがある。本場の博多ラーメンが味わえて満足した。

時間とのたたかい

新聞の制作

それぞれの取材を終えた後は会場に戻り、班のメンバーとともに新聞作成を行った。

写真の選別などを行った。記事はそれぞれが分担した部分を持ち帰り、ホテルで書いた。二日目の夕方からレイアウトを考え、担当する記事の振り分け、

削など、細かい調整を行った。深夜までやりとりを行った班もあったようだ。

三日目は、朝から記事の小見出しや写真のキャプション(説明)、



どの班も苦勞しながら作成した(上)。原稿は手書き(下)

写真のサイズ調整や編集後記など、そのつど確認しながら、切り分けられた紙に原稿を書いた。この時に活躍したのはスマートフォンだ。記事のやりとりはもちろん、取材

後に生じた疑問点などをネットで調べることがあったためだ。

有田焼の原料を訪ねて

総文では、48の班が12のコースに別れて取材を行った。中澤(3年)が所属していた班は、有田焼で有名な有田町を訪れた。



泉山磁石場で取材を行った

佐賀県の伝統工芸品である有田焼。その歴史は16世紀末にまでさかのぼる。

慶長・文禄の役をきっかけに焼き物の技術が朝鮮から伝わった。その後17世紀初めに有田で泉山磁石場が発見され、有田焼の原料となる陶石が手に入るようになった。焼くときの原料となる松の木が豊富だったことも有田焼が発展する要因となったようだ。

陶磁器の製造開始が遅かった日本だが、17世紀後半からはヨーロッパに輸出するほどに技術が成長。明治期にも精巧な作品が多く作られた。最初に訪れたのは泉山磁石場である。通常

灼熱の吉野ヶ里遺跡

三日目、閉会式終了後に、希望する学校は吉野ヶ里歴史公園へ研修取材に出かけた。

二ーランドとほぼ同じくらいである。約1時間30分の取材時間の中で園内を歩いたが、日差しが強く、陣笠や日傘の貸し出しコーナーには多くのひとが詰めかけていた。係員の方におすすめを聞いたところ「北墳丘墓」と「主祭殿」だと教えてもらったため、地図を片手にそちらに向かった。



主祭殿のある北内郭は吉野ヶ里のまつりごとをつかさどる最重要区域。主祭殿の中では実際の神事の様子が人形によってあらわされていた。

主祭殿などの大きな建物をどうやって建てたのか。係員の方に聞くと、地面に穴を開けて、柱を斜めに入れて引くと少ない力で持ち上げることができる。そのような方法を用いたのだらう、とのことだった。

こんなものを食べました②

総文では、九州の名物を取り揃えた弁当を食べることができた。「2019さが総文おもてなし弁当」というこの弁当には、鹿児島のとりに、長崎の焼きちゃんぽんや宮崎のマングローブリン、佐賀のごはんなど、九州の料理が盛りこまれている。二日目のおもてなし弁当は佐賀県内の名産が中心になっており、飽きさせない工夫が感じられた。弁当には説明書きが同封されており、どのおかずがどの県の名物なのか分かる。



初日の「総文弁当」

勾玉を手作り

吉野ヶ里歴史公園の中には、石包丁や火おこし、また勾玉を作るなどの体験ができる。

勾玉づくりは、5cmほどの長方形の石を砥石で削り、勾玉の形に



作成途中の勾玉

編集後記

今回の総文に参加することで、新聞の書き方や考え方が、様々な違いを学ぶことが出来た。また講話も参考になることが多く、今後の新聞作りに生かしていきたいと思う。

舟橋先生の話「ほしかったので仕方がない」

仕上げていく。作成時間は約1時間。今回は90分しか滞在時間がなかったが、顧問の舟橋先生は挑戦し、40分でもやりやうと頑張ったそう。